

一、大学院教育学研究科の発足

本学は元来大学院を中心とする方針で企画されたのであるが、法令上大学院のみの大学は設立不可能であるので、まず教養学部を以て発足し、教育研究所を並設してその準備にあたった。今春、教養学部の最初の卒業生を送り出すと同時に、第一着手として大学院教育学研究科の設置を計画し、三月十五日附を以て文部省から認可を得た。その認可内容は、

研究科	専攻課程（修士）	毎年入学定員	総定員
教育学研究科	A、教育心理学専攻	八	一六
	B、教育方法学専攻	二二	四四
	視聴覚教育法 英語教育法	（八） （二四）	

設立未だ日も浅い大学であるので、色々の問題があったが、多くの方々の御好意御援助によって大学院が発足し得たことを、心から感謝している。

四月二十九日に大学院学生入学宣誓式を行ったが、入学者は教育心理学四名、視聴覚教育法六名、英語教育法七名であった。なお本学年度開講された大学院のための講義は次の通りである。

教育心理学

教育心理学概論 三単位 岡部弥太郎教授
 発達心理学の諸問題Ⅰ 三単位 岡部弥太郎教授
 教育心理学実験的研究法 四単位 肥田野 直講師
 心理学的教育的諸検査 三単位 岡部弥太郎教授
 中学、高校に於ける評価と学習 三単位
 モーリス・トロイヤール教授

発達心理学の諸問題Ⅱ 二単位 岡部弥太郎教授
 視聴覚教育法

視聴覚教育原論 三単位 西本三十二教授

ロイ・ウェンガー教授

視聴覚教育実習 二単位 ロイ・ウェンガー教授

視聴覚教育の組織及び管理 三単位 ロイ・ウェンガー教授

ラジオ及びテレビ教育 三単位 西本三十二教授

布留武郎助教授

マス・コミュニケーションの諸問題 三単位

西本三十二教授

英語教育法

言語学習心理学 三単位

アーサー・マッケンゼー教授

英語教育教材の研究 三単位

ウィリアム・モア教授

英語教授法演習 三単位

ウィリアム・モア教授

英語音声学上の原理と日本語研究の方法

三単位 ロバート・ゲルハート教授

比較言語学 三単位 ロイ・ミラー助教授

選択科目

教育哲学の諸問題 三単位 小島 軍造教授

所 報

教育哲学の講読演習 三単位 日高第四郎教授

西洋教育史 三単位 小林 澄兄講師

明治時代に於けるキリスト教教育思潮 三単位

長 清子助教授

キリスト教人間学―その歴史的諸相 三単位

石原 謙講師

ヘブライズムの人間観 三単位 秋田 稔助教授

教育社会学の諸問題 三単位 岡田 謙講師

十七世紀の宗教詩 二単位 斎藤 勇教授

英文学原典研究 二単位 豊田 実講師

西洋古典(ギリシヤ語)講読 三単位 神田 盾夫教授

視聴覚教具の物理的原理 三単位 ドナルド・ワース教授

なお、本学年度開設学科は、当初の計画の一部であり、来

学年度には教育哲学及び理科教育法の二学科目を増設すべ

く、目下認可申請中である。

二、教育学特別公開講座について

九州大学教育学助教授故大竹満洲子女史が先年アメリカに

留学中、特別親しく御指導をうけた縁故から、とくに故人との約束を果たすために、イエール大学の教授 J. S. Brubacher 博士は本年三月東京に来られ、間もなく九州大学で教育学の特別講義を担当され又五月初めには名古屋における日本教育学会でも特別講演をなさった。博士の来朝の世話をされたフルブライト委員会の西村巖氏と九大の原教育学部長、平塚教授等の好意的斡旋によって同博士を本学にもお招き出来ることになった。

しかし博士をお招きしたいのは、本学以外にも多数あり、且つ、博士は、日本の大学の視察には関心をもっておられるが、諸処で断片的な話をするには好まれないとの情報を得たので、小林澄兄氏（慶大）原田実氏（早大）海後宗臣氏（東大）石山脩平氏（教育大）村上俊亮氏（学芸大）宮崎ひろし氏（IDE）等と相謀って、希望をまとめて、諸大学連合主催の形式で教育学特別公開講座を開催することにした。

博士は一九二八年以来久しくイエール大学にて教育史及び教育哲学を講ぜられその令名はアメリカ本国はもとより、ヨーロッパ、アジアの諸国にも知られ、その著書 *Modern*

Philosophies of Education, History of the Problems of Education 等は、わが国でも少なからざる読者をもっている。博士は又 John Dewey Society や NEA の年報報告書の編輯責任者として、すぐれた識見を示して来られた。近くは UNESCO の委嘱により、示唆に富むカリキュラム本質論を公刊され、一九五二年及び五六年にはレバノン共和国のベイルートに招聘され、特に昨年はアメリカの教育者を率いて緊張せる国際情勢下にあるヨーロッパ各地の教育を視察され、視野をますます広めると共に、経験を一層ゆたかにされたという。七月初旬の帰国に先立つ極めて御多忙ななかを、さしくってわれわれの懇請を容れて下記の公開講座に出て下さったのである。その御厚情に対しここに重ねて深い感謝の意を表する。

この容易に期待し難い機会を、本学大学院の学生はもとより広く篤学の聴講者にも提供するために、主催諸大学の関係者を通して次のような要領で案内状を出した。

教育学特別公開講座

I 講 師 イエール大学教育史及び教育哲学担当教授

Dr. John Seiler Brubacher

II 日取と講義題目

六月二十二日(土) Educational Aspects of the

Cold War

二十三日(日) Religious and Moral Education

ation

二十四日(月) Nationalism and Education

二十五日(火) The Meaning of Liberal

Education

二十六日(水) Academic Freedom

二十七日(木) Philosophies of Education

III 時間 毎日午後五時～七時(講義と質疑)

IV 場所 明治大学大学院(新館三階)講堂

神田駿河台・中央線お茶の水駅より徒歩約一分

V 聴講者 教育学専攻の上級学生(四回生)以上、同

大学院学生、同助手、教育学関係の学者研究

者等を優先招待いたします。百五十名限り

VI 手続 聴講申込書提出(それぞれの大学当事者ま

所 報

たは、下記の二カ所へ)

締切は六月十九日(水)聴講無料

VII 通訳 文学士 斎藤勇一氏の予定

VIII 主催 東京大学教育学部

早稲田大学大学院(教育学研究室)

慶応義塾大学(文学部)

東京教育大学

東京学芸大学

明治大学

国際基督教大学

以上の共同主催

梅雨期で時候はよくなかったが、博士の声望と会場の便利のためか、毎回約一五〇名宛、欠くことなく有力な聴講者を集め得たばかりでなく、真摯活発な質疑応答のあったことはまことにしあわせであった。

博士の講義は、一貫した立場から準備され、相次ぐ諸重要問題に関して、極めて明快に論点の所在を分析指摘しつつ、聴講者の思慮判断に強く訴えるものであった。その基本的立

場即ち Pragmatic Relativism という基調には異論もあつたようであるが、その場合を容認すれば、傾聴すべき示唆に富む所説が非常に多かった。これらの講義は、一応テープ・レコーダーにおさめられているが、これを更に博士の訂正を乞うた上で、民主教育協会の好意的取計いによって、遠からず出版して一層広汎な読者に頒ちうる予定である。

この企てに関する経費はすべてロックフェラー財団の指定援助費によつてゐる。これなしにはかかる講座は全く不可能であつたであらう。ここにはるかに同財団に対して心からなる感謝の意を表する。

三、夏期「民主教育共同研究会」の開催

昨年秋、ICU教育研究第三号に中間報告として発表されたロックフェラー財団援助による小島軍造教授担当の「民主主義教育の哲学的基礎」については、その後も引続き同教授を中心に討議改訂を加えて来たが、本年は、従来とは趣向をかえて、夏期「民主教育共同研究会」を開催し、然るべき現場の教師諸氏の協力の下に、この原案を中心に自由な研究討

議を行い問題の所在をつきとめると共に教育の現場からの反響をできる限り摂取して、原案と教育の現実との連関を強めることに努力することとした。

この共同研究者の選考には、なるべく積極的建設的批判と協力とをうるために、特に意を用いた。三鷹市教育委員会指導主事新井三郎氏、新宿区教育委員会指導主事永保秋光氏、都立教育研究所員古島稔氏、墨田区東吾嬬小学校長大塚重雄氏、武蔵野市教育委員会指導主事渡辺正氏等、平素から、教育指導道徳教育に特に深い関心をもてる方々を煩わし、その経験と知恵を通して真剣熱心な共同研究者を集めることとして予め数次の協議打合を行い、各自の信頼しうる友人仲間を手づるとして選考にとりかかった。

こうして、六月二十日には別記の様な趣意書^{*}を印刷し六月二十五日、心当りの志望者に発送し、七月七日を参加申込締切日と定め、大体東京在住者を中心に近県の人若干名を加えて、合計六十名。うち男子七〇%、女子三〇%を目標に考慮することにした。その結果七月十五日、男子四七名、女子二二名を参加者として決定し招待状を出した。

そして、別記の日程表^{**}に準じて、八月五日（月）から八月十二日（月）まで、八日間、起居を共にし、活発な研究討論を行った。

六日、七日の両日の午前には原案作製の主任者たる小島教授より原案内容の説明があり、午後は、これを中心に質疑応答をし、八日、九日の両日は便宜上、四班に分れて討論を行い、十日、十一日は、高等学校班一、中学校班二、小学校班一、合計五班に分れて討議した。その間世話人として前述の学外の五氏と本学の教育哲学関係者七名は、それぞれ各研究班に分属して、日夜研究に参加し、更に十一日、十二日両日は、全体討議をなした。

又八月十一日夕食後には、日本学術会議々長茅誠司博士に乞うて「ソ連中共の科学事情」についてという題の下に、先年の旅行談をしていただき、その際のカラー・スライドをも見せていただいた。八月十二日午前十時から十二時にかけては、広島大学々長森戸辰男先生を煩わして「民主主義の反省」という講演をお願いした。両先生のお話は両方とも、極めて貴重な稀にみるよい講演であったと、聴講者は、心から感謝し

満足していた。それでこれを少数者の聴講に限るのは惜しいと思ったので、両先生を煩わしてその記録に更に御加筆改訂をお願い出版頒布することを計画し、民主教育協会の同意を得て、別記の小冊子^{**}として具体化するに到った。

又会の参加者には、それぞれ忌憚のない感想、批判、意見を記録して残していただいた。それらの資料並に個人的通信札状等約二十通を通して、うかがわれることは、参加者が単に一時の客として招待せられたという以上に、共同の使命と問題と憂を分つ日本の教育者として、相親しむ機会を与えられたことを特に感謝している人が多かった。かかる事実は、全く予期以上の成果であって、まことに小島教授をはじめ多くの関係者の苦心の賜である。今後もかかる心情的友誼的連絡を維持することは勿論、出来れば理性的理論的交渉の糸口ともいたしたいとひそかに願っている。

* 夏期「民主教育共同研究会」趣意書

戦後十年間、わが国の政治経済社会教育等の機構は大規模徹底的に民主化された来た。しかしそれは国民の創意に基くというよりは、むしろ国際情勢上外から負わされた最初の課

題の成果であるといえるであろう。ここに二つの根本問題が潜んでいる。一つは民主主義そのものの価値の問題であり、他の一つは民主主義と日本の歴史的社会的現実との間にある「ひらき」の問題である。

万一、民主主義そのものが単に占領軍の政策又は命令であるが故に、降服者にとっては正に「避くべからざる災害」であったというに過ぎないならば、占領の事実が終熄し日本の主権が回復された暁には容赦なくそれを排除してこそ独立国民の名に価するであろう。しかし、もしも民主主義そのものが政治的社会的原理として人類普遍の道理に基くものであり、従ってまた日本人一般の良心にも内面的共鳴を呼び起さずにはおかぬものであるならば、われわれはその「由来」如何にかかわらず、誠実と熱情とを以て、これが実現に邁進しなければならぬ。われわれは民主主義の本質を以て、日本民族が、国民としても個人としても、国際社会又は人類の共同体において信頼と尊敬とを勝ちうる地歩を築くためには、当然守るべき正道であると信ずるからである。

しかし乍ら、「民主主義の本質」とは政治的社会的「理念」

であって、決して単なる歴史的事実ではない。事実としての民主主義はこの普遍的理念を内に宿し乍ら、民族の文化や国民の文化や国民の歴史等様々の制限をうけた特殊的個性的な形態において存在するのみである。従って日本には「正当な意味において」日本にふさわしい民主主義があつてしかるべきであろう。

顧みるにわが国現在の民主主義は機構又は制度としては可なり進んだ形態を整えてはいるが、遺憾乍ら、それは一般国民にとっては言わば半強制的輸入物であるが故に、それらの機構や制度を運用し維持し発展させるに必要な内面的予備条件たる心構に欠けるところが甚だ多いのである。かかる心構即ち民主主義的思想、判断、感情、生活、経験、訓練等による精神的態度を広く深く培い育てることこそ新教育のかけがえなき任務である。

新教育の基本原理は、すでに十年前一九四七年三月、教育基本法に十項目に亘って明示されている。日本人のうちには、これをも外部からの「おしつけ」と推測しているものも少なくないようであるが、とんでもない誤解であって、それは

当時の教育刷新委員会の自主的判断に基くものである。しかしこの基本法は、何といっても法律であって大綱を示したものに過ぎない。この大枠に盛らるべき精神内容を批判的建設的立場から、学問的体系的に基礎付けることが、わが教育学会の第一の根本問題である。

われわれは久しくこれを他に待望していたのであるが、思うところあって無力を省みずわれわれ自らこの問題と対決する決意をしたのである。同時に問題の重要性和困難を思い、多くの同志同胞諸氏の援助協力を請うことにした。たまたま某財団の極めて自由寛大な条件による財的援助と民主教育協会の理解深き精神的援助を得たので、次の如き「研究の補強、補足整理の策」を立てたのである。

先ず「民主主義教育の哲學的基礎」に関する原案を小島軍造教授を中心にして研究作製し（A）これを知名の学識経験者約三十名よりなる「反響委員会」にかけて自由討議に附し、多角的な批評と腹臍なき忠告を受けて原案を修正発展させること。一昨年六月来この委員会をくり返すこと既に五回これは一応完了したのである。次に（B）かくして得た修正

案を「共同研究会」において、教育の現場に苦心を重ねている教師諸氏の体験と具體的現実とに照合して、問題と障碍の所在をつきとめ、原理と現実との生ける連関を打樹てることである。そして今回の夏期共同研究会こそ、その第一回の企てである。かかる研究会を重ねることによって、原案を中心に現場の有志諸氏との共同討議と自由なる意見交換によって必要な補足修正を加えて原理に肉付けをしたいのである。（C）上述の経過をへて将来相当の成果を得た場合には、主要の論点を整理叙述すると同時に、これに連関せる問題論点の所在を明らかにし、未解決の問題は未解決のままに指摘して、印刷に附し、何らかの方法によってより多くの教師諸氏及び学生青年諸君の研究上の参考資料として配布したい心組である。

要するに今回の共同研究会は、いわゆる講習会とは類を異にするものであって、原案の説明と質疑応答とは厭うところではないが、要はむしろ、現場の諸氏の「原案に対する反応、意見、批判」に傾聴して主催者側の経験不足を補うところにある。他方もしもこの原案が諸氏の現実の切実な問題解決に

益するところがあるとすれば、憂を分ち志を同じくするものとしてこの上ない喜びである。

一九五七年六月

国際基督教大学教育研究所

日高第四郎

二三四

日 程 表

	5日 (月)	6日 (火)	7日 (水)	8日 (木)	9日 (金)	10日 (土)	11日 (日)	12日 (月)
6:30								
7:00								
8:00		朝食	朝食	朝食	朝食	朝食	朝食	朝食
9:00								全体会
10:00		テキストの内容説明	テキストの内容説明	分科会	分科会	分科会		先民主義の 戸主教育反省
11:00	受付							
12:00	開会式							
1:00	歓迎食会	昼食	昼食	昼食	昼食	昼食	昼食	歓迎食会
2:00	自由時間							
3:00		質疑	質疑	分科会	分科会	分科会	全体会	
4:00	オリエンテーション	応答	応答					
5:00		夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	
6:00	懇談会							
7:00			討議	映画会	討議		茅先生 “中ソの科学教育”	
8:00								
9:00								
10:00								

茅誠司、T・A・ラワリーズ「民主主義の反省」右と同じ
「みてきたソ連および中共の教育事情」三〇円、発行所 民主教育協会、森戸辰男、

四、教育心理学教室

日本応用心理学大会をICUで開催

五月十八・十九の両日、日本応用心理学会の第二十三回大会をICUを会場として開催した。ICUが全国的な学会の会場になったのはこれが最初である。用い得る室数のことなども考えて研究発表の数があまり多くならないように消極的な態度を取ったが、それでも実際に百三十四の研究発表がなされ、それに二つのシンポジウムが持たれた。集った者は五百余であった。今回の応用心理学大会は著しく教育的な色彩が濃厚であった。部門を社会、教育、臨床、人格、産業、犯罪、その他、の七つにしたが、教育に関する発表が最も多く五十六、それについて臨床の二十八、人格の十二で、臨床や人格の部門では教育に関するものが多いのであるから、教育的なものが圧倒的に多かったといつてよい。産業は十、社会は九、犯罪が五、その他が十四である。このその他という中には知覚に関するものが大部分である。古くからの伝統的心理学においては知覚に関するものが中心的な位置を占めていたといつてもよいのであるが、現在の興味はより多く人間そ

のものに、そして特に人間の教育に向いているといえるであろう。本大会において岡部教授は学会々長として大会を主宰する他、一つのシムポジウム（京都両洋学園の要体教育）の司会者となった。ICU関係では西本教授がもう一つのシムポジウム（教員養成カリキュラムの研究）に出られ、トロイヤ教授、ヴェント講師、牧助手が研究発表をした。

教育心理学実験室完成

大学院の教育心理学科の研究施設として本館四階に実験室が新たに作られた。四階において丁度放送研究室と対をなす位置にある。室は八つからなっている。その中三つはその中で行われていることが隣接の観察室から一方視のガラスを通して観察されるようになっていゝ。三つあるのは大中小の区別によるのである。どの室もいろいろな目的に役立て得るようになっていゝ。心理学の実験演習なども勿論ここでやることが出来る。

五、視聴覚教育センター

今年度より大学院が発足し、その専攻科目として、わが国

唯一の視聴覚教育の講座が誕生した。当然、全てがわが国での最初の試みでもあるので、その講義計画、講義の形態等の問題解決に力を注いだ。なお、今年度後半は、時の問題となっている教育放送、教育テレビの問題を検討した。

協議会開催

対外的な行事としては例年の如く、視聴覚教育および放送教育の二つの研究協議会が、七月二十九日から八月三日まで、各三日間開催された。昨年はアメリカからエドガー・デール博士を迎え、視聴覚教育の主として理論的な面の検討が中心となったが、今年はその理論を日本の現実へ移植した成果を、全国各地から持寄って、発表、検討した。しかし理論的、学問的探究を軽んじたわけではなく、この両協議会ではこれまでより以上に、理論と実際の結びつきをより強固にすることに主力を注いだわけで、本年は特に現場の指導者の参加をもとめ、また視聴覚教育研究会においては、各大学で製作した自作視聴覚教材の発表が行われた。

両協議会とも、百二十数名の参加者を得たが、その日程及び討議題目は次の通りである。

第四回視聴覚教育研究協議会

七月二十九日 視聴覚教育とは何か

七月三十日 マス・コミュニケーションと教育

七月三十一日 テレビ教育

第三回放送教育研究協議会

八月一日 放送教育とカリキュラム

八月二日 放送学習の形態

八月三日 教育テレビ

なお、第四回視聴覚教育、第三回放送教育の各研究集録は、目下編集集中で、近く刊行の予定である。

テープ・ライブラリー充実

昨年十月に放送および録音用スタジオが本館四階に完成した。この完成を契機として、テープ・ライブラリーの充実に努めているが、特に本年度の目標としては、大学の講義に利用できる各種録音教材を収集するとともに、ICUの特色である語学練習のためのテープおよびその充実に重点を置いている。現在、英、独、仏、伊、日本、デンマーク、ポルトガル、タイ、中国、スペイン、ロシア、ビルマ、オランダ、ヒンドスタン、ハンガリー、朝鮮、マレー、ノールウェー、トルコの十九カ国語練習用シリーズを保有し、その他、内外国

語による著名人の講演等も、二〇〇本あまり保管している。ここに保管されているテープは、学内外の希望により、貸出し、複製に応じている。なお語学練習のための、六人用ブースがスタジオの一角に置かれているが、これの運用については現在検討中である。

写真集とフィルム・ストリップの製作

「写真集ICU一九五七年」第一回卒業式を記念するため、ICU創立の歴史および現状を物語る写真集を作製した。卒業式用につくった三千部では各方面の要望に応じきれなくなり、またニューヨークのJICU財団からの希望もあって、さらに四千部を増刷してアメリカへ送った。

フィルム・ストリップ *Life at International Christian University* シリーズとして、次の六本が完成した。

1. *International Christian University*
2. *A Faculty at Home in Japan*
3. *ICU Audio-Visual Center*
4. *Back to the University*
5. *Using the Library, Part I*
6. *Using the Library, Part II*

所 報

A・V教具教材の利用状況
視聴覚教具の使用頻度表（一九五六年度）

月	教具			
	幻灯機	映写機	テーブ・レコーダー	プレコード・プレイヤー
四	一八	一九	一八	二一
五	四〇	一一	二一	四三
六	三三	二八	六〇	一二
七	一六	一八	二九	九
八	一一	一四	一三	一
九	六一	一六	二四	一三
一〇	七七	二六	一三九	一八
一一	五六	四	七五	三〇
一二	四二	一五	六五	一二
一	四一	六	二〇	五
二	五〇	二	三四	九
三	一五	七	三二	三
計	四六〇	一六八	五三〇	一七六

註 教具の使用頻度は正規授業であれば、一回の授業、一教

具をもって一回とする。他の場合は一教具が貸出され、それが時間に關係なく返却される迄をもつて一回とする。
視聴覚教具利用別表（一九五六年度）

利用別	教具			
	幻灯機	映写機	テーブ・レコーダー	プレコード・プレーヤー
授業に利用	三四六	二九	六六	四四
学校行事	二五	四〇	一二二	一四
他研究用				
学生の自発的利用	八九	九九	三四二	一一八
計	四六〇	一六八	五三〇	一七六

学内外部門にみた映画上映頻度表

業 業	授		計
	校外映画会	校内映画会	
人文科学科	一六	三八	一二七
社会科学科	二四	一六	一六二
自然科学科	二一	八四	一二二
英語学科	四	二二	三八
計	二九	一二二	二八九

註 頻度は、上映フィルム長の短にかかわらず、一題名、一回の上映をもつて、一回とする。
提供元別にみたフィルムの分類表

提供元別	一九五五年度		計
	一九五五年度	一九五六年度	
1 ICU AV ライブラリー	三六	二四	六〇
2 U S I S	三八	四九	八七
3 他の団体	二八	四四	七二
4 配給社より賃借	一九	四〇	五九
5 その他	六	五	一一
計	一二七	一六二	二八九

註 他の団体とは、在日外国大使館、NHK等である。

1、2、3、5による提供は無料である。4による提供は、有料であるが、2年間の集計で、全体の二〇・四％である。

A・Vセンターの学内外へのサービスは、各種設備の拡充と、陣容の整備と併行して、年々増加の一途を示している。

六、教育実習

今年の実習は最初から成るべく本学周辺地区の公立学校にしたいと思つて、三鷹市の教育委員会を通じて公立の高等学校、中学校にお願いしたところ、幸いにも皆さんの御厚意と御協力で、一つの都立高等学校と三つの区立中学校に、前期、後期の二期に分れて、お願いすることが出来た。

元來教育実習は、教生一人一人が相当長時間教育の現場に於て実習することが必要なので、普通は先ず基本実習を附属学校に於て行い、その後地域の各学校に分れて、少なくとも数週間、その継続的、發展の実習を行うのである。本学に於ては、四カ年間の必修百四十単位は学生にとって一般大学のそれに比べて重い負担であり、又それに伴う各種学科目の配列等の關係から、止むを得ず免許法の定める最低単位を僅かに越える二・五単位を以て教育実習の必修単位とした。然し又、同時に少しでもこの欠を補うために前述の如く本年は本学周辺の比較的多数の地域学校を選んで実習期間中の時間の利用と労力の集中を計り、成るべく多数の学校に少数の教

生を長時間実習させる様にした。即ち實質的には四十七名の教生が七つの学校に配分され、それが更に数教科目に分れるというわけで、従て実習校並びに大学の指導教師達も個々の教生に比較的緊密なる接触を保ちつつ行き届いた指導を行うことが出来た。

本年の実習参加学生は四十七名で昨年の五十四名に比べると約十五パーセントの減少である。これは本学卒業生で教師を希望する者が減つたと云うことよりも、現実に教職に就くことの困難なことで、実業界その他への就職が本学の卒業生には比較的樂であると云うことにもよるかと思う。本来本学の教育的雰囲気はキリスト教的基礎の上に教職の途に進もうとする者を少からず産み出しているのであるから、今日これ等学生の要求に応える方途を講ずることは困難であるが、極めて肝要のことだと思ふ。

実習は昨年と同じく二週間、教生は毎日午前七時五十分の朝礼から放課後のクラブ活動、研究会、職員会議、家庭訪問等に至る迄夫々の持場に於て熱心にこれに参加し、短期間にも拘わらず実習校の先生や生徒に深く親しみ、教生としての

成果をよく挙げる事が出来た。これは実習校の好意ある協力によることは勿論であるが、本学学生の終始変らない真面目な態度に由来するところも極めて大きいと思う。他方又大学側としても、四つの学校に四週間毎日夫々の指導教師が出校し、教生の実習状況を観察し、指導し、又実習校の担任教師と連絡し、協議し、絶えず遺憾なきを期したことも併せてここに記しておきたい。

本学の教育実習計画は常に次の組織のもとに行われる。

1 教育実習委員会（これはカリキュラム委員会の小委員会である教員免許状委員会の一部である。）

構成委員 社会科学科、人文科学科、自然科学科、英語学科の各科より一名乃至二名の教授又は助教授が参加する。

任務 Ⅱ 予め実習の内容、時期、場所、期間、進行等につき詳細に検討し、更に実習中は実習状況の参観、指導、評価等を行う。

2 教育実習連絡協議会（これは実習校との連絡のため実習校幹部教員と大学側実習委員とで組織し、実習実施前後数回に亘り実習内容その他につき詳細に連絡協議を行う。）

尚実習校の選定依頼に当っては、学長、副学長、関係教授等によって慎重にして懇切な折衝が行われる。

次に本年度教育実習の概況を記すと

実習生四十七名（男子一二名、女子三五名）

実習の日程

指導講義、三日間、教生全員に対し、実習の概念につき出来るだけ詳しく、観察、参加、実習の各項目につき講述す。

実習校と教生の配当

都立三鷹高等学校、英四、社四、理〇

三鷹市立第一中学校、英一八、社〇、理七

〃 第二中学校、英二、社四、理〇

〃 第三中学校、英八、社二、理〇

実習期間、前期五月一三日（月）—五月二五日（土）

後期五月二七日（月）—六月八日（土）

日頃比較的恵まれた環境の中で教育され、キリスト教精神の土台の上に国際的視野に立つ広い教養と学問的基礎とを与えられている本学の学生達が一度日本の学校教育の実態にふ

れ、日本の教育者達が何を考え、何を悩み、何を求めているかを少しでもうかがい知って来ると、教育者の往く道の容易でないことが分り、彼等の日常の思索と行動の上にも多くの示唆があったことと思う。幸いにして教生の態度は、終始明朗さと真面目さとを失わず、周囲の人々に好感を与え、そのため未だ本学を知らない人々、或は多少の偏見と誤解とを保持している人々に正しい認識と理解とを与えるに役立ったことを心から歡ぶ次第である。それにしても本大学が現実の日本に真に貢献し得るためには、こうした学生達の外界との接触の機会に於ても学生自身又大学自身絶えざる研究と反省とが必要であると思う。

第三号目次

研究論文

寛容について(その二).....	関屋 光彦
天皇制とキリスト者の意識.....	武田 清子
自叙伝にあらわれた国立大学学生の宗教 と社会思想.....	岡部弥太郎
協同と競争について.....	古畑 和孝
民主主義教育の哲学的基礎.....	小島 軍造
Anthropology and Educational Theory.....	J. A. Lauwerys
Education for International Understanding in Shushin Textbooks.....	Tori Takaki
報告と所感	
ロアリス博士を迎えて.....	日高第四郎
書 評	
T. Romein: Education and Responsibility を読んで.....	秋田 稔
所 報	